

【 成果速報 】

にら黄化腐敗症状の原因菌の特定と発生要因の解明

【背景】

県西部のにら産地では、数年前から2月から4月頃に、外葉が黄化、萎凋し、その後株全体が萎れる症状（黄化腐敗症状）が発生しています（写真1）。発生程度には年次による差があるものの、一旦発生するとほ場全体に蔓延する場合もあり、出荷量の大幅な減少のほか、出荷調整に要する労力の増加など、大きな問題となっています。

当該症状を示したにら株から菌を分離したところ、ネギ属作物に腐敗性の症状を引き起こすことが知られている細菌が複数確認されました（写真2）。そこで、これらの細菌によるにらへの病原性を確認するとともに、微小害虫の関与も含めた発病要因の解明に向けて試験を行っています。



写真1 にら黄化腐敗症状の発生株および発生ほ場

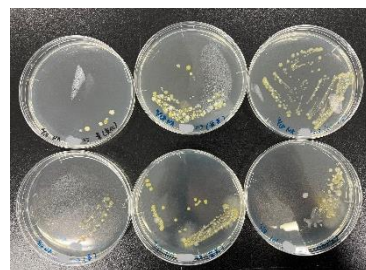


写真2 黄化腐敗症状から分離された細菌

【結果】

滅菌したつまようじに分離菌を付着させ、にら切片に接種したところ、黄化や水浸状の病徴が認められ（写真3）、原因菌候補が2菌株に絞られました。その2菌株の、菌液を付着させたハサミで地際付近を刈り取る有傷接種を行い、28℃のインキュベータ内で管理したところ、約40日後に黄化症状が認められました。

また、ネダニ類の影響を調べるため、1ポットあたり10頭のネダニ類をにら株元に放虫し、菌液を灌注接種したところ、ネダニ類を放虫していない区に比べて発病度が高くなりました。このことから、ネダニ類の加害が発病を助長する要因のひとつである可能性が示唆されました（写真4）。

今後は、原因と考えられる菌株の菌種を特定するとともに、発生要因の解明を進め、効果的な防除対策の確立に向けた試験を実施していきます。



写真3 にら切片に認められた黄化症状（左）および水浸状症状（右）



写真4 ネダニ類放虫区（左）、ネダニ類無放虫区（右）

（病理昆虫研究室 菅野 舞祐香）